日本式庭園後楽園の入口にふさわしい意匠で架ける 鶴見（つるみ）橋

宝永４年（1707）、能などを楽しみに後楽園を訪れる武士の専用橋として架けられたのが初代鶴見橋です。一般に開放されたのは明治になってからで、旭川や後楽園に舞い下りる鶴が橋の上から見えたことから、鶴見橋と呼ばれるようになったということです。

しかし、木橋の鶴見橋は、旭川が氾濫する度に流失するため、架けては流されるの繰り返しで、本格的な治水工事が始まる昭和初期まで、架け替えは繰り返されました。

現在の鶴見橋は、陸軍大演習時、大本営が後楽園におかれることとなり、天皇を迎えるために急遽永久橋に架け替えられたものです。昭和５年（1930）５月１日起工、わずか５カ月後の11月３日に渡橋式という、突貫作業で行われました。

しかし、工期は短いものの、天下の名園の玄関前に架かる橋ですから、「純日本式庭園に調和する橋」にすることになりました。橋の上部は木曽御料林払い下げの檜で高欄を組み、平安時代の藤原式の擬宝珠を付け、橋床の中央部を約1.2ｍの上がりこう配にし、さらに橋面左右の４カ所に特に工夫をこらした突出部を設けて、この内部に青銅製の春日灯籠が配されました。

またコンクリート部も上部との調和を保たせるため、高欄の木肌と同じ淡い茶褐色になりました。コンクリート橋脚やコンクリートをかぶせて平面に仕上げた橋桁の外側面は、掻き出し仕上げに茶色の着色が施されています。

現在の高欄は、その後にコンクリートで作り直されたものですが、特殊な木目模様の塗装によって、昔の姿をそのまま伝えています。

昭和30年代からの高度経済成長及び自動車の普及による交通量の増大に対処するため、国道53号と国道２号を結ぶ県道が計画されました。その一部として橋の上流に新鶴見橋が昭和46年に完成しました。交通の流れは新鶴見橋に移りましたが、鶴見橋も付近住民の生活橋として、後楽園への玄関口として重要な役割を担っています。

■位置図

高欄には擬宝珠を設け、銅製の行灯が飾られた

後楽園の玄関橋に木曽御料林払い下げの檜が用いられた

後楽園

鶴見橋